

2024年度 入学試験問題

2月1日 第1回 午後

国語（45分）

注意

1. はじめのチャイムがなるまで問題用紙には手をふれないでください。
2. 問題は2から13ページまでです。
3. 解答用紙には氏名でなく、受験番号を書いてください。
4. 机の上にあるQRコードのシール（どれでも良い）を解答用紙右上の「ここにシールをはってください」のわくの中にはってください。
5. 解答はすべて解答用紙に書いてください。
6. おわりのチャイムがなりはじめたら、書くのをやめて、えんぴつをおいてください。
7. 句読点・記号も字数に数えます。
8. 本文は出題の都合上、一部変更しています。

三輪田学園中学校

一 — 1〜10のカタカナの部分を漢字に直しなさい。
また、— 11〜15の読み方をひらがなで書きなさい。
つづけ字ではなく、一点一面をていねいに書くこと。

1 さつまいもをムす。

2 速さをキノう。

3 時をキザむ。

4 フンマツ状の葉。

5 船のキテキが聞こえる。

6 エネルギ―シゲンが少ない。

7 親孝行はビトクである。

8 別の問題がハセイする。

9 レンメンと続く伝統。

10 運動会の行進でキシユを任される。

11 早朝から商う店。

12 自分自身を省みる。

13 器が大きい。

14 湯治のために温泉に行く。

15 神社に参拜した。

二 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

人間は、進化の歴史を通じ、一貫して付き合う仲間の数を増やしてきました。これは、1人間の祖先が熱帯雨林からサバンナという危険な場所に進出したことが関係しています。長い歴史のある時点において、おそらく地球規模の寒冷・乾燥化が起こり、それによって熱帯雨林が分断され、そこで暮らしていた動物たちはサバンナに出て行くか、森が残る山に登るか、低地に散在する熱帯雨林に残るかの選択を迫ら

れたのでしょうか。結果的に人間は熱帯雨林を出ました。

そこで、いくつかの特徴を発達させたのです。その一つが集団の大きさです。危険な場所では、2集団の規模は大きいほうが有利です。数が多ければ、一人が狙われる確率は低くなるし、防衛力も増します。

危険を察知する目がたくさんあれば、敵の発見効率も高まります。実際、森林ゾウとサバンナゾウでは、サバンナゾウのほうが、身体も大きく、集団規模も大きい。人間も、危機から自分の命、そして仲間の命を守るために、集団の規模を大きくしなければなりませんでした。

ただし、集団を大きくすると、食物や安全な休息場所をめぐってトラブルが増えます。仲間の性質や、自分との関係をきちんと頭に入れておかないとうまく対処できなくなります。そのためには脳を大きくする必要があります。皆さんの中には、人間の脳は、言葉を使い始めたことで大きくなったと思っている人がいるかもしれませんが、人間が言葉話し始めたのは7万年ほど前にすぎません。一方で、脳が大きくなり始めたのは、それよりずっと以前の約200万年前に遡ります。言葉を使ったから脳が大きくなったのではないのです。

人間の脳の大きさには、実は集団規模が関係しています。チンパンジーとの共通祖先から分かれた約700万年前から長らくの間、人間の脳は小さいままでした。3この頃の集団サイズは10〜20人くらいと推定されています。これは、ゴリラの平均的な集団サイズと同じ。言葉ではなく、身体の間調だけで、まるで一つの生き物のように動ける集団の大きさといえます。サッカーが11人、ラグビーが15人など、スポーツのチームを考えるとわかりやすいでしょう。これは、皆さんが、互いに信頼し合っておしゃべりをする友だちの数に当たります。200万年前、脳が大きくなり始めた頃の集団サイズの推定値は30〜50人程度。ちょうど先生一人ですとめられる一クラスの人数ですね。日常的に顔を合わせて暮らす仲間の数、誰かが何かを提案したら分裂せず

その後、人間の脳は急速に発達します。今から約60万〜40万年前には、ゴリラの3倍程度の1400ccに達し、現代人の脳の大きさになりました。そして、この大きさの脳に見合った集団のサイズが、100〜150人。(中略)

これは、ロビン・ダンバーというイギリスの人類学者が、人間以外の霊長類の脳の大きさと、その種の平均的な集団サイズの相関関係から導き出した仮説に基づく数字です。ダンバーは、平均的な集団サイズが大きければ大きいほど、脳に占める大脳新皮質、つまり知覚、思考、記憶を司る部分の割合が大きいことを明らかにしました。

そして、現代人の脳の大きさに見合った集団の人数を示す、この「150」という数字は、実に面白い数字であることがわかりました。文化人類学者の間で「マジックナンバー」といわれているのはそのためです。食料生産、つまり農耕牧畜を始める前まで、人間は、この150人くらいの規模の集団で4狩猟採集生活を送っていました。天の恵みである自然の食物を探しながら移動生活をする人々には、土地に執着したり、多くの物を個人で所有したりといったことがありません。限られた食料をみんなで分け合い、平等な関係を保って協力し合いながら移動生活を送るためには、150人が限度なのでしょう。そして、現代でも、このような食料生産をしない狩猟採集民の暮らしをしている村の平均サイズが、実に150人程度なのです。

言い換えれば、150人というのは、昔も今も、人間が安定的な関係を保てる人数の上限だということです。皆さんの生活でいえば、一緒に何かを経験し、5を共にした記憶でつながっている人ということになるでしょうか。ぼくににとっては、年賀状を出そうと思ったとき、リストを見ずに思いつく人の数がちょうどこのくらいです。互いに顔がわかって、自分がトラブルを抱えたときに、疑いもなく力になってくれると自分が思っている人の数ともいえます。

今、ぼくたちを取り巻く環境はものすごいスピードで変化しています。人類はこれまで、農耕牧畜を始めた約1万2000年前の農業革命、18世紀の産業革命、そして現代の情報革命と、大きな文明の転換点を経験してきました。そして、その間隔はどんどん短くなっています。農業革命から産業革命までは1万年以上の年月があったのに、次の情報革命まではわずか数百年。この四半世紀の変化の激しさを考えれば、次の革命まではほんの数十年かもしれないかもしれません。その中心にあるのがICT (Information and Communication Technology) 情報通信技術)です。インターネットでつながるようになった人間の数は、狩猟採集民だった時代からは想像もできないくらい膨大になりました。

一方で、人間の脳は大きくなっていません。つまり、インターネットを通じてつながれる人数は劇的に増えたのに、人間が安定的な信頼関係を保てる集団のサイズ、信頼できる仲間の数は150人規模のまままだということです。テクノロジが発達して、見知らぬ大勢の人たちとつながれるようになった人間は、そのことに気づかず、AIを駆使(Ⅱ自由自在に使いこなす)すればどんな集団規模は拡大できるという幻想に取り憑かれています。6こうした誤解や幻想が、意識のギャップ(Ⅱ食い違い)や不安を生んでいるのではないかと。ぼくはそう考えています。そして、子どもたちの漠とした(Ⅱぼんやりとした)不安も、このギャップからきているのではないのでしょうか。

人間はこれまで、同じ時間を共有し、「同調する」ことによって信頼関係をつくり、それをもとに社会を機能させてきました。「同調する」というのは、たとえば、ダンスを踊ったり歌を歌ったり、スポーツをしたり、あるいは一緒に掃除をしたり、同じように身体を動かしたり調子を合わせたりしながら共同作業をするということです。

(中略)人間のコミュニケーションにおいて大事なものは、時を共有して同調することであり、信頼はそこにしか生まれません。母と子が、

何の疑いもなく信頼関係を結べるのは、もともと一体化していたからです。胎児のときは、お母さんの動きを直に感じとっています。そのつながりは、その後、赤ちゃんとして母親の身体の外に出た後、へその緒を切っても残ります。

そして、そのつながりを、音楽や音声、あるいは一緒に何かをするという形で継続しているのが家族や仲間などの共同体です。こうした **a 共同体** がもつ文化の底流には、同じような服を着たり、同じテーブルを囲んで食事をしたり、同じような歌を歌ったり、同じような作法を共有したりといった、身体を同調させる仕掛けが埋め込まれています。人々はそれを日々感じることで、疑いをもつことなく信頼関係をつくり上げています。信頼は、こうした継続的な同調作用がなければつくれません。

人間と共通の祖先をもつサルやゴリラを見てもそれはよくわかりません。彼らは身体的なつながりで群れをつくっています。これは必ずしも、文字通り「身体を接触させる」ということではなく、日々、お互いの存在を感じ合うことで、仲間として認識するということです。挨拶を欠かさないのもその一つ。ニホンザルであれば、親しい者同士、グルーミング（毛づくろい）をする。一方で、数日間群れを離れるなどしていったん身体的なつながりが切れてしまうと、二度と群れの仲間と認識しなくなります。群れのトップに **I 君** 臨んでいたニホンザルであっても、群れを離れば二度と同じ地位には戻れません。オスの最下位に **II 甘んじて**、いじめられることになりません。言葉をもっていない彼らは、こうした日々の活動を通して、「身体がつながりあっている」という感覚を明確にもちます。

一方、言葉をもった人間は、言葉で表現しなければ納得できなくなっています。すでに述べたように、脳の発達には、集団サイズが関係しています。おそらく人の移動が頻繁になり、集団が分裂や統合を繰

り返して150人を超える集団が生まれるなどしたときに、言葉を使った情報処理能力が必要になり始めたのでしよう。言葉をもったからこそ、農耕牧畜が始まって以降、多くの集団が統合されて民族や宗教の大集団が生まれ、数々の王朝や国家などといった規模にまで拡大したのです。

しかし、言葉で表現できるものはごく一部にすぎず、言葉だけで信頼関係をつくることはできません。だから、頭の中では言葉を通じて仲間とつながっていても、身体がつかっている感覚が得られない。逆にいえば、身体でのつながりを得ないために、言葉にこだわってしまふ。「そもそも言葉と身体は一致することがないものである」ということを理解できずに、一致を求めてさまようようになりました。言葉をもったからこそ集団サイズを大きくできた一方で、その言葉によって、**7 お互いがつかっているという感覚をもつことが難しくな**ってしまつたのです。

さらに、情報通信技術の発達によって、継続的な身体をつながりで社会をつくるという、人類が何百万年もかけてつくり上げてきた方法が崩壊しかけています。一人一人の人間が、家族や地域などのコミュニティから引きはがされてバラバラになったことで、これまで信頼関係で結ばれてきた共同体が機能しなくなっている。インターネットは、継続性だけは保証しました。インターネットで情報を交換し合っていれば、絶えずつながっていると思うことは可能だからです。ライン、ツイッターといったツールを通じて、時間や空間を軽々と超えて常時つながっている感覚を得るようになりました。でも、それは言葉をはじめとする「シンボル」を通じてつながっているだけで、身体がつかぎ合わされているわけではありません。

スマホを通じたコミュニケーションでは、ダンスによる同調のように、同時に行うこと、同時に感じることはできません。スマホの動画

の中で人が動いていたとしても、それは記録されたものであって生身の動きではありません。たとえそれがライブであったとしても、自分の都合で止めることができます。記録されたものは、逆に延々とリピートすることもできます。それは、自分だけの時間だからです。

一方、リアルな社会は現在進行形がずっと続いていて、振り出しに戻ることができません。現実というのは、自分の時間であるとともに相手の時間でもあります。そのため、「時間を共有している」という感覚は自分だけの都合で続けることはできません。いつか終わります。

身体をつなぎ合わせるためのイベントとして祭りなどがあるものの、これは一過性のものであります。イベント志向の強い現代ではスポーツの大会やコンサートが各地で開催されますが、そこでいっしょに騒いでもそのつながりはその場限りです。共同体を継続させる大きな効果はもちません。その欠陥を埋めるために、SNSがもてはやされているわけですが、それらは決して身体をつなぐ代替にはなっておらず、逆に疎外感をつくる結果となっています。

しかし、インターネットでつながることに慣れると、肌で接している現実の世界の自分より、スマホの中にいる自分のほうがリアリティをもつものになってしまう可能性があります。【A】、現実はなかなか自分の意図するようにはならないからです。思い通りにするには他者と交渉しなくてはいけない。そこでは他者からプレッシャーをかけられて泣くこともあるでしょう。こんな厄介な現実世界より、自分の思い通りになるほうが、居心地がいい。スマホの世界は、面白くなければやめればいいし、振り出しに戻って繰り返すことだってできます。こういう世界に慣れると、どうしても現実よりスマホの世界にいたくなる。

人間は、適応能力の高い動物です。それでも大人はある程度完成されているので、身体や心を適応させるのが難しい面がありますが、若い人

たちの適応能力は非常に高い。とりわけ子どもたちの適応能力の高さには目を見張るものがあります。スマホでのやりとりにもすぐに適応してしまう。生まれたときからスマホが身近にある子どもたちは、自分が操作できるスマホの世界がリアルになり、8 スマホ以外の現実が二の次になつてしまう可能性がある。ここにこそ多くの不安があります。

本来、人間は「互いに違う」ということを前提に、違うからこそお互いに協力し、異なる能力を合わせながら、一人一人の力ではなし得ないことを実現してきました。そのために、人間は他者とのつながりを拡大するように進化してきたわけです。人間同士が尊重し合うことの前提にあるのは、相手を100%理解することではなく、「相手のことはわからない」という認識です。わからないからこそ知りたいと思うわけで、極端なことをいえば、わかってしまったら、もう知る必要はありません。自分と同じようにできていて、自分と同じ心をもっていると思えば、何もその人と付き合う必要はなく、自分だけを拡張していけばいいからです。

【B】、ICTやAI (Artificial Intelligence // 人工知能) は、個人を拡張する方向に進んでいて、異なるもの同士がつながり合つて新しいことを生み出すことを目指していないように思います。インターネットは、「同じである」ことを前提として付き合うバーチャルな空間です。相手も自分も同じように行動することを前提につながつている。

生身の人間の触れ合いより、ネット上の世界に重きを置いていると、人間同士の付き合いが、「お互いに違う」ことを前提としているということがわからなくなります。スマホなど、非常に便利と思われるコミュニケーションツールによって、本来違うはずの人間が均質化する方向に誘導されている。

これが、現代に闇をもたらしている正体ではないでしょうか。

世界のあらゆるものが数値化されることによって相対的に評価されるようになる中、人間も、生身の身体ではなく、デジタル情報に置き換えられて評価されるようになってきました。【C】中国では、ある企業が人間の点数化を始めています。高級な家に住んだり、社会的に高い地位にいたり、高級なレストランや店に行つて食事や買い物をしたりすれば点数が上がる。そして、その点数が近い人同士は相性がいい、【D】、自分より点数の高い人を友だちとして選ぶだほうが自分の利益になるといった考えのもと、点数を基準に友だちを選びをする人たちが登場しています。こうして直につながりのないものへの⁹情報による評価が、信頼のツールになり始めています。

人間は、もともと自分で自分を定義することができません。ゴリラやチンパンジーとの共通の祖先だった時代から、他者の目によって自分を評価したり意識したりする生き物でした。人間は強い共感力をもっているために、相手から期待されていることを感じ取れるからです。そう考えれば、進化のプロセスを経て、人間の社会が情報化時代に至ったことは理解できます。そのほうが、評価がわかりやすい。

でも、人間は不確かなものです。人間は、数値を見て、好きになったり、嫌いになったりするわけではなく、相手と直接会つてその具体的な姿や行動や表現などを見て、どこかに憧れたり、どこかで拒否したり、共感したりする。王子さまが、貧しい家に生まれた女の子に心を動かされ、身分をわきまえずに結婚するシンデレラ物語のようなことは、おとぎ話の中だけではなく現実にも起こります。

人間と人間との出会いや関係は、決して予測できるものではなく、どういふところで火花が散るかわかりません。それは、人間はそれぞれ、予測がつかないような中身をもっているからです。どう表現されるかは、その時々によって変わり、それを他者は、数値でなく直観で判断します。人間と自然の出会いも、人間と動物の出会いも、動物同

士の出会いも同じ。そこで新たな関係が生まれ、別の出来事によってその関係が壊れ、あるいは関係が持続されたり強化されたりする。そこで起こることを100%予測することはできません。だからこそ人間と動物の出会い、人間同士の関係は面白いのです。

この面白さこそが、生きる意欲につながる。そう考えれば、10
人間が見失っているのは、生きる意味だと言えるかもしれません。

(中略)

人間は、感情や意識を忘れ、知能に偏り始めたことで、本来、決してわかるはずのない「好き嫌い」や「共感」、「信頼」といった感情を、情報として「理解」しようとするようになりました。

かつて人間は、そんなことに悩む必要はなく、意識に従順(Ⅱ)さからわずにおとなしく従うこと)であり続けられました。意識や感情は本来すぐく曖昧なもので、波のように寄せたり引いたり、霧や雲のように消えたり現れたりします。「好き」という感情を細かな要素に分析しなさいといわれてもできるものではないでしょう。それは、知能でわかるものではなく、感じるからだからです。犬や猫を飼っている人は、考えてみてください。ペットの犬をかわいと思う気持ちは、いくら分析してもわかりません。自分にすり寄ってくる犬の感情は、尻尾を振ったり吠えたりする様子を見れば感じとれますが、何がその感情を呼び起こしたのか明確に分析することは不可能です。もしかしたら人間の1000倍以上の嗅覚で、人間が無意識のうちに発している匂いを感じとってそれに反応しているのかもしれないが、それはわかりません。確かなのは、お互いにそういう感情が湧いたという事実です。五感の異なる動物と100%わかり合おうというのは無理なことです。それでも、飼い主として一緒に暮らしていれば、彼らが何をしたいのか、わかることも多いですよ。曖昧なものを曖昧なままで了解し合うのが動物たち、特に異種間のコミュニケーションなので

す。それで両者に不自由はありません。

こうしたペットとの関係を、かつて人間は人間同士でも結んできました。相手の心を明確に知ることはできないけれど、了解できるものはある。その了解できるものが自分と相手の間に横たわっているからこそ信頼関係が生まれます。信頼関係をつくるのは言葉ではありません。言葉は代替物であつて、信頼関係へのリアルな架け橋になるのは、それ以外の五感の中、正しくは、五感を感じられる身体の中にあります。それを、言葉でうまく代替して空間を広げるのが人間的な社会的つくり方であつて、その際、身体が感じた「曖昧なもの」は曖昧なままにしておいていいのです。

ぼくたちは、そういう世界にずっと生きてきました。そこで幸福やら喜びやらを抱き、一方で憎しみや嫉妬といった負の感情を、他者の助けも借りて解決してきた。それが人間の社会性だったわけですよ。

情報学に乗っ取られてから、人間はどんどん分析的になり、すべてを情報化しなくては気が済まなくなりました。人間は、感じたことで衝動づけられたり助け合ったりします。あるいは、食卓を囲んで楽しい思いをしたり、踊って興奮したりする。こうした感性の部分は情報化できません。たとえ情報に還元したところで、表面的な情報にしかならないでしょう。そして今、「11 わかるうとすることがわからないことにつながる」という矛盾が生じています。情報化することとは、わからないことを無視するということです。それは、隠されているものを捨てていく作業だからです。人間は、情報化することによってバカになってしまいました。

共感というのは「相手の気持ちがわかる」ことです。それを、「相手を理解すること」だと誤解している人たちが、多いように思います。

12 相手を「理解」するのではなく、ただ「了解」することが、互いの信頼関係を育んだり、好きになったりする架け橋になるということが

わからない。同調する能力があるにもかかわらず、それがお互いの信頼関係を育んだりすることもわからない。さらには、他者の自分に対する感情や、他者に対する自分の感情が、「好き」という言葉で表される感情にIII 匹敵するものかどうなのかも判断できないのです。

その不安が、身近な人への過度なこだわりや要求となり、それがじめや嫉妬、暴力につながっているのではないのでしょうか。実際には生み出されていない信頼を、一番近くにいる仲間に過剰に求めるがゆえに起きている不幸な事件も多いのではないかと思います。

(中略)

こういう時代は、確信がもちにくく、自分というものがわからなくなりま

特に子ども時代に「自分は世界に受け入れられている」という思いを抱けなかった人ほど、インターネット上で必死に自己実現を図ろうとしています。dフェイスブック(=SNSの交流サイト)で「いいね!」を押してもらおうと、荒っぽいことをするのもそのためでしょう。自分がやっていることを他者に認めてもらいたい、注目してもらいたいと思うからです。自分というストーリーの中で生きようとすれば、他者を巻き込まなければ完結できません。だから、他者を強引に自分のストーリーの中に入れることのできるインターネットは都合がいいのです。

自分本位のインターネットの世界は、言葉を手に入れ、フィクション(=作りごと)の中で生きようになつた人間が行き着いた場所です。人間は、フィクションによって自分を認めてもらう方式をつくり出したわけです。そうして、フェイスブックやライン、ツイッターを駆使して、どこかで他人とつながろうとする。でも、身体の間隔がなくして、本当につながることはできません。

自分のやっていることを他者に認めてもらいたい、注目してもらい

たいという願望をもち続けてきたからこそ、人間はその進化の過程で付き合う仲間の数を増やそうとしてきました。しかし、真につながれる数は150人のまま増やせてはいけません。今後、技術が進歩して、インターネットを通じて身体がつながり合われている感覚を何らかの手段でつくることができれば、それはすごいことだと思います。でも今のところ、それは望めそうにありません。

情報技術によって利便性が高まった生活自体をもとに戻すことはできません。未来の社会を考えたとき、ICTやAIは受け入れざるを得ないでしょう。付き合う人数を増加させるというICTの進化の方向は、人間の進化と同じです。そこにあるのは、付き合う人の数を増やし、仲間の範囲を広げれば、ビジネスチャンスは増すし、知識も増える、自分の可能性も広がる、という考えです。しかし、人間が共感によってつながる人の数には限界がある。感情を置き去りにして「脳」だけでつながる人間の数を増やせば増やすほど、身体の間がりが失われ、人間は孤独を感じるようになります。ぼくたちは、コミュニケーションの規模に応じて、適切なコミュニケーションツールやルールを使い分けなくてはなりません。本心に信頼できる人とのつながりをつくるには、時間と空間を共有し、¹³五感を使った付き合いをする必要があります。

それは、生物としての人間が、そういう付き合いをして進化をしてきたからです。その進化の跡は、今の人間社会のいろいろなところに、気がつかないまま埋め込まれています。大事なものは、人間は「生物として」進化してきたことを自覚し、生物としての人間の幸福な在り方、生き方を考え、現代文明と付き合っていくことです。ほかの動物に見習うべきところはあるかもしれませんが、見つめるべきは人間独自の生物学的な部分です。今、その大事な人間の特性がIVないがしろにされている。だから、人間は人間らしさを失いかけているし、つらい状況

にも陥っているのです。

(山極寿一『スマホを捨てたい子どもたち

——野生に学ぶ「未知の時代」の生き方』ポプラ社より)

問1 — I〜IVの意味として最も適当なものを次から選び、記号で

答えなさい。(I・IIは4ページ、IIIは7ページ、IVは8ページにあります。)

I 「君臨して」

ア 少しずつ力をつけてのしあがって

イ 強大な勢力をもって他を支配して

ウ 絶対に誰もさからうことができなくて

エ 大勢の仲間に圧倒的に支持されて

II 「甘んじて」

ア 無理矢理押しつけられて

イ 何もできないまま逃げ出して

ウ 仕方のないものとして受け入れて

エ そのことに十分満足して

III 「匹敵する」

ア つりあいがとれる

イ 責められる

ウ うまく合わせる

エ 振り回される

IV 「ないがしろにされて」

ア 存在自体を疑われて

イ 変えようとしても変えられなくて

ウ 存在しないかのように軽く見られて

エ 不要なものとして取りかえられて

問2 【 ー】 A～Dに次のア～エをあてはめ、記号で答えなさい。
(同じ記号は一度しか使えません。)

ア たとえば イ しかし ウ あるいは エ なぜなら

問3 ー1「人間の祖先が熱帯雨林からサバンナという危険な場所に進出した」理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人間が同じ環境が続くことに不満を感じ、新しい場所に移動して食料の確保をしようとしたから。

イ 地球全体の寒冷化によって、動物たちの気性が荒くなり、同じ場所に住み続けると命の危険が出てきたから。

ウ 地球全体の気候変動によって今までの生活環境が変化し、住んでいた場所から移動せざるをえなくなったから。

エ 熱帯雨林から低地に移動した他の動物たちの暮らしが、今よりも良さそうだったから。

問4 ー2「集団の規模は大きいほうが有利」とありますが、その理由を四十字以上四十五字以内で答えなさい。

問5 ー3「この頃の集団サイズ」とありますが、「この頃の集団」の特徴として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 一緒にいなくても必要なききは手を貸すことができる。

イ 何でも話し合い、お互いをよく知ることができる。

ウ リーダーを一人に決め、集団としてまとまることができる。

エ 言葉を使わなくてもまとまって動くことができる。

問6 ー4「狩猟採集生活」とありますが、その「生活」の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 自然から得られた食料を集団で分け合い、協力する。

イ 自然をそのまま利用して畑をつくり、様々な食料を交換する。

ウ 長年所有した森で採れたものを自分の食料とする。

エ 広い土地を持っている人が多くの食料を得て、皆に分ける。

問7 ー5にあてはまる四字熟語として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 一日千秋 イ 喜怒哀楽 ウ 日進月歩 エ 晴耕雨読

問8 ー6「こうした誤解や幻想」とは何ですか。五十字以上六十字以内で答えなさい。

問9 ー7「お互いがつながっているという感覚をもつことが難しくなってしまった」理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 現代の人間は身体つながりを重視するあまり、言葉で信頼関係を築く大切さを忘れてしまったから。

イ 言葉には様々な表現があるので、一度信頼関係をつくれたとしても必ず行き違いが生じてしまうから。

ウ 人間は民族や宗教の大集団を形成した結果、共通の言葉を話せなくなつて信頼関係がなくなつたから。

エ 現代の人間は身体つながりを軽視して、言葉だけで信頼関係をつくらうとするから。

問10

——8 「スマホ以外の現実が二の次になってしまいう可能性がある」とはどういうことですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア スマホの世界で失敗した人間関係を、現実世界でやり直したくなるということ。

イ 現実世界で出会った人ともスマホでコミュニケーションをとらなければ、気がすまなくなるということ。

ウ 現実世界よりも、自分の思い通りにつながることをできるスマホの世界を優先したくなるということ。

エ スマホの世界で出会った人よりも、現実の世界で知り合った人を信用したくなるということ。

問11

——9 「情報による評価」とはどのような評価方法ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 数字で表したもので評価する。

イ 内面的な部分だけで評価する。

ウ 数字だけでなく言葉で表現して評価する。

エ 自分が知っていることで評価する。

問12

——10 「今、人間が見失っているのは、生きる意味だと言えるかもしれないせん」とありますが、その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人間同士の付き合いは相性を気にしなければならぬものなのに、本能的なものに頼って出会いの幅を広げているから。

イ 人間は直感を用いて他者との交流を深めていくのに、何もかも論理的に整理した世界を求めて誰とも関わりを持たずとしないから。

ウ 人間は偶然の出会いによって新たな関係を築いたり壊したりするものなのに、そのような出会いを受け入れようとしないから。

エ 人間と動物の出会いや人間同士の出会いはまったく予測できないものなのに、主観的な基準で判断することを求めすぎているから。

問13

——11「わかろうとすることがわからないことにつながる」とはどういうことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア すべてを情報化することで物事を簡単に理解できるようにしてきたが、新たな難しい問題は解決できなくなってしまったということ。

イ 情報化することで様々なことを分析し理解してきたように思えるが、実はわからないことを切り捨ててわかったつもりになっているに過ぎないということ。

ウ 情報化によって表面的に理解することはできるようになったが、感性のように複雑なものを分析する技術はまだ発明されていないということ。

エ 情報化によって感性の部分も分析的に理解することができると多くの人間は思っているが、それが不可能であることに気づいていないということ。

問14

——12「相手を『理解』するのではなく、ただ『了解』する」とありますが、次の例のうち筆者の言う「了解」にあてはまるものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 友だちは幼い頃から体操を習っているので、体操が得意なのだと思った。

イ 友だちがプールバッグを持っているので、今日からプールの授業が始まるのだと思った。

ウ 休みになると友だちは家族でキャンプに行くとき、うらやましく思った。

エ 友だちがめずらしく浮かない顔をしていたので、何か嫌なことがあったんだなと思った。

問15

——13「五感を使った付き合い」とはどのようなものですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 直接対話をし、自分自身の感覚に基づいて生まれた感情を大切に付き合う。

イ 別の知り合いから聞いた情報をもとに、相手の性格を判断しようとする付き合い。

ウ 一定期間情報技術を使ってデータをとり、相手の情報を総合して判断する付き合い。

エ 対面での交流でなく、ネット上のつながりに限定して交流を深める付き合い。

問16 この文章を読んで生徒が話をしています。それを読んで、後の問いに答えなさい。

A 「本文の4ページ上段に『a 共同体がもつ文化』ってあるけれど、学校も共同体だね。」

B 「学校でみんなでする活動だと、どういったことがあるだろう？」

A 「三輪田学園だと運動会があげられるね。運動会では、みんなでおそろいの体操服を着るし、学年全員で応援ダンスも作るね。」

B 「おそろいのものを着て、一緒にダンスをするといった（b）によって結束力が強まるのかな。」

A 「でも一度だけでは結束力は強まらないよね。色々な行事に同じ仲間と（c）的に取り組むからこそ、信頼関係はできてくるように思うな。」

B 「学校行事にはそういう面があるんだね。ところで、本文の7ページ下段では、SNSが話題になっているね。」

A 「最近だと趣味の写真をdフェイスブックなどのSNSに投稿するのもよく目にするようになったね。また、写真だけでなく動画も簡単にSNSに載せられるようになって、その人の近況がよくわかるようになったよね。」

B 「でもSNSの問題のある投稿がニュースで話題になっているのを見たよ。」

A 「便利だけど使い方に気をつけなきゃね。」

① ~~~~~ a 「共同体がもつ文化」にあたらぬものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア レストランで会社の創業記念を祝い、みんなでフランス料理のフルコースを食べる。

イ 患者が同じ検査着を着て、病院でそれぞれ雑誌を読みながら順番を待つ。

ウ 地域の一斉清掃のボランティアに毎月参加し、近所の人たちと一緒にゴミ拾いをする。

エ 中学入学時から合唱団に参加し、毎年定期演奏会のステージに立つ。

② 本文の内容と合うように（ ） b・cにあてはまる言葉を次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 合理 イ 同調 ウ 楽観

エ 規律 オ 訓練 カ 継続

③ ~~~~~ d 「フェイスブック」に問題のある投稿をする人たちの目的を、筆者は何のためだと考えていますか。本文から漢字四字でぬき出しなさい。

問17 この文章の特徴として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 文化人類学の研究で解明された類人猿と人類の違いに触れながら、人類の優秀さを強調し、さらに人類に有利な技術の活用方法を提案している。

イ 現代の情報化社会の長所と短所を説明した上で、情報中心の社会をさらにつくり上げていくためにはどのような技術開発をすればいいか、考えを示している。

ウ 文化人類学の研究で究明されたことを踏まえながら、人間としてのあり方を考えることで、現在の科学技術の進歩の方向に疑問を投げかけている。

エ 現代の情報化社会の問題点を明確にした上で、一人一人に合った情報化を進め、さらに個人に心地よい社会をつくるべきだという持論を述べている。

問題は以上です。